

(第 173 回) 神奈川研究会議事メモ			
開催日	2025 年 1 月 13 日 (火)	出席者 敬称略	西村二郎・大谷宏・山崎博・持田典秋・ 神田稔久・宮本公明・飯塚弘
時間	15 時～16 時 15 分		
場所	Zoom によるリモート会議		
技術課題	ある留学生の足跡 (持田)		
内容	<p>ある留学生の足跡</p> <p>1. カザフスタンについて</p> <p>1) カザフスタンの国勢</p> <p>2) カザフスタンの歴史</p> <p>3) 中央アジア 5 か国と日本の関係</p> <p>2. ある留学生の足跡</p> <p>1) カザフスタンの大学の日本語学科に在籍。</p> <p>2) 筑波大学に日本語研修生として来日。</p> <p>3) カザフスタンの大学卒業。母校の助手として活動。</p> <p>4) 筑波大学大学院博士課程前期留学生として来日</p> <p>5) 帰国・結婚</p> <p>6) 出産</p> <p>7) 筑波大学大学院博士課程後期学生として再来日</p> <p>8) 博士論文の提出・博士修得・卒業</p> <p>9) 帰国</p> <p>1 0) 筑波大学助教として採用され来日</p> <p>1 1) 筑波大学准教授に昇進し活躍中</p> <p>1 2) 永住権を持ち、つくばにマイホームを持ち家族で生活。</p>		
発表者からのコメント	発表の際カザフスタンと日本の関係についての質問がありましたが、十分に答えられなかったので、添付で「カザフスタンを知るための 60 章」明石書籍の一部分をコピーしてお送りします。		

<p>会員からのコメント</p>	<p>長い間、カザフスタンからの留学生を様々な支援されてこられた持田さんに拍手をお贈りしたいと思います。</p> <p>外交は、政治レベルから民間レベル、民間も会社や個人など草の根レベルまで、時間をかけて構築された重層的な背景で成立しているもので、かつての元総理が世界を俯瞰する外交と称して世界中に出かけていましたが、そのような根無し草の外交は定着しないと思います。中国は、世界中に外交のネットワークを広げていますが、それを支えるものとして、現地にいる中国系住民の存在があるように思います。世界中どこに行っても中国料理店があるように、世界中に中国系住民が住んでいます。</p> <p>そのように考えると、民間レベルの息の長い外国との交流の大切さと、持田さんを含むそれを支える人たちに改めて敬意を表したいと思います。現在、排外的な風潮が蔓延しているからこそ強く思います。</p> <p>カザフスタン、初めて知ることばかりで無知を恥じるころから始まりました。距離的にはさほど遠くはありませんが、西側とのつながりがカスピ海経由と考えると、日本から見て世界で一番遠い国と言っても良いかと思います。</p> <p>そのような国とどう交流していくかとなると、物のやり取りよりも情報のやり取りが中心で、日本からは教育やインフラ構築構想支援などになるのでしょうか？その時には、同じ顔を持ったアジア人として交流のしやすさがあると思います。 （神田稔久）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 持田さんのお話、大変興味を持って聞かせていただきました。留学生の研究内容が言語教育でしたので、カザフスタンの事情を推察してみました。旧ソビエト連邦共和国（旧ソ連）は多民族国家で、構成するカザフスタン、ウズベキスタンなどの各共和国は、それぞれカザフ民族、ウズベク民族？など各民族の集合体でした。旧ソ連が19991年に解体し現在の共和国になっても事情は変わりません。各共和国の言語は、旧ソ連と同様に各民族の構成割合に従って、カザフ語（カザフ人）、ロシア語（ロシア人）、・・・となっています。新しく共和国として独立するには、言語教育をどうするか、国家として民族統合は大きな問題です。そこでネットで調べてみました。カザフスタンは、カザフ語＋ロシア語＋英語の三言語政策をとったようです。旧ソ連時代にはロシア語が共通言語でしたが、カザフ語を復権させたい、しかし多くの人が話しているロシア語を禁止できないというジレンマからです。それと国際化のために英語も必要と考えた三言語政策です。使っていたロシア語を選択せざるを得なかったようですが、各共和国で事情が異なるようです。ただ、理念は素晴らしいですが、教育現場の負担はたまらないようです。ちなみに、持田さんの言う留学生の英語論文のタイトル（カザフスタンの多言語教育政策に関する一考察）が検索でヒットしました。 ・ カザフスタンは世界有数のウラン生産国で、日本の原子力発電にとって重要な供給源であり、また、レアメタル（レアアース、タングステン、モリブデンなど）の埋蔵が豊富です。日本語教育が盛んで大学には日本語学科が多いようです。逆に、カザフスタンにとり、日本は高品質なインフラ投資国として信頼されています。技術移転や人材育成での協力が評価されており、お互いにパートナーとして信頼がおけると存在です。 ・ 資源・物流・地政学の観点から、日本にとって戦略的価値が高く、日本が進める「ロシアを通らない欧州ルート（カスピ海ルート＝ミドル回廊）」に対して、カザフスタンは、ロシア経由の北回廊がウクライナ戦争で機能低下したことを背景に、ミドル回廊を「世界貿易における必要不可欠なルート」と位置づけています。また、従来の海上輸送45～60日が、15～20日に短縮される可能性があります。昨年末の中央アジア5ヶ国との首脳会談で、高市首相は「互恵的な協力関係を一層引き上げる」と強調しました。今後の進展を見守りたいと思います。 （飯塚 弘）
------------------	---

<p>会員からのコメント</p>	<p>* まず、持田さんは NPO を介して「理科実験」の出前授業、今回御紹介の「海外からの留学生の支援」と、社会貢献活動を実践しているシニアとして敬意を表したいと思います。</p> <p>* 今回御紹介の事例は、単に日本の大学に留学した、というだけでなく、博士課程を終え、当該の筑波大学から請われて助教となり、現在は準教授として活躍中である。さらに驚くのは、結婚して二児をもうけ、夫君共々の来日である。本人の素質、決意も並々ならないものがあつたと推察できる。</p> <p>* 一般論として、日本の大学で学び、卒業後は日本で就職する。こうなることは、留学生を受け入れた日本にとって喜ばしいことである。日本で就職しなくても、何らかの形で日本と関係がある仕事をして欲しいものである。そのためには、留学生に日本という国を理解してもらうことが必要である。最も重要なのは日本人の国民性であろうか。</p> <p>* 私は現役時代、中国・ベトナムから合計 10 名程度の研修生を受け入れていた経験がある。当時は収入の格差も大きく、北京大学や精華大学、ハノイ工科大学など、アジアの有名大学からも応募者があつた。外国人技術者がいることで、HD 工場内の技術発表会は英語で行った。その後は制度自体先細り消滅した。中国に帰国した当時の研修生から間接的に聴いた不満は日本人社員との処遇の違いだった。現在残っている痕跡は社内結婚した一人の女性研修生だけである。</p> <p>* 持田さんは、意識せずに、相手の要望に応じていたのだろう。</p> <p>* 日本で永住権迄取った相手の方の心情も知りたくなった。 西村二郎</p> <p>・ 長い間の留学生家族のサポートありがとうございました。私自身は、1981 年から 1 年間ミネソタ大学大学院に visiting researcher の資格で留学していて、前任者のホストファミリーに引き続きお世話になりました。そのご家庭は 3M 関連の会社を定年退職されたあと、大学に登録して留学生のお世話をされていました。当時、日本の大学にそのような仕組みがあるとは聞いたことがなかったので、アメリカは仕組みをつくるのが上手だなーと感心した記憶があります。実際、アメリカの一般家庭の夕食を妻、娘と一緒にいただき、いろいろな雑談で理解が深まったと思います。特に、キリスト教が生活活動や考えかたに深く根ざしているところは、学校生活では得られない経験でした。</p> <p>・ その後、8 年の駐在員生活でもそのような理解に助けられたことは幾たびかあります。現在、家内は地域の外国人向け日本語教室で、中学生のアジア人に日本語を教えています。そのような経験も根底にあるのではないかと思います。</p> <p>・ 持田さんの話のなかでカザフスタンの大学に日本語科があるというのは少し驚きでした。これも昔の経験ですが、サウスカロライナの州立大学にも日本語科があり、日本人の先生が教鞭をとっておられます。日本語は漢字や仮名があつて習得が大変と思いますが、話すことなら、若い人にはそれほど苦痛ではないのかもしれませんが。特に、日本のアニメを見て、耳だけで日本語が話せるようになった若者がアニメジャパンに集まってくるなど、言葉のバリアはそれほど高くないと思えます。</p> <p>・ これからは、言葉の壁を乗り越えていく日本人を応援していくことが大事かとおもいます。とりあえず、子や孫には積極的に英語で会話ができるようになってほしいなと思います。 (宮本公明)</p>
------------------	--

<p>会員からのコメント</p>	<p>カザフスタンがカスピ海の近くにあることは知っていましたが、改めて世界地図で見るとカスピ海の北側から東側に大きな国土を持ち、北方はロシアと、東方は中国との長い国境線で接しています。カザフスタンは、1991 年の独立以降、中国およびロシアとの間で重大な軍事的な国境紛争を起こすことなく、外交的交渉を通じて早期に国境を確定させることに成功しました。</p> <p>これを成功させた要因は、</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 早期の法的な国境確定：独立後、速やかに中露両国と国境条約を締結し、合法的な国境線を確定させました。 ② 実利的な外交（マルチベクトル外交）：ロシアとの伝統的な同盟関係を維持しつつ、中国とも経済協力を強める、バランスの取れた外交方針を採用しました。 ③ 上海協力機構の利用：ロシア・中国・カザフスタンが加盟する枠組みにより、国境地帯の信頼醸造が進みました。 <p>カザフスタンは、ロシア、中国という巨大な隣国との間に領土の「未確定部分」を残さないことで、大きな衝突を回避したと言えます。これには、ソ連崩壊後の独立から約 30 年間の長期にわたり大統領として国を率いた初代大統領ナザルバエフの外交手腕に負うところが大きい様です。</p> <p>日本との関係では、カザフスタンには三菱商事など約 60 社の日本企業が進出しており、エネルギー、資源、デジタルインフラなどの分野で協力関係が強化されていますが、身近なところでは日本製の紙オムツは値段が高くてよく売れている様です。</p> <p>最近の動きとしては、</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 首脳級会合：2025 年 12 月には日本と中央アジア 5 カ国の首脳会合が開かれ、重要鉱物（レアメタル等）の安定供給や脱炭素化での協力が合意されました。 ➤ デジタル拠点化：カザフスタン政府は「中央アジアのデジタル拠点」を目指しており、日本のデジタル技術への期待が高まっています。 ➤ 投資環境：日本からの累積投資額は 1993 年以降で 90 億ドルに達しており、日本は主要な投資国の一つとなっています。 <p>カザフスタンは、日本と同じく、「核兵器による災禍」を体験しています。1949 年 8 月、カザフスタンのセミパラチンスクで、ソ連最初の核実験が行われ、ソ連崩壊までに 456 回の核実験により、（人口の 1 割に当たる）150 万人のカザフ人と国土の 3/4 が放射能による重大な被害を受けました。現在まで、この汚染除去と国民への健康影響の軽減が大きな問題となっています。</p> <p>これらを踏まえ日本は、カザフスタンに、独自の事業として「非核化協力」を実施しています。またカザフスタンは、原子力エネルギーの平和利用、「核不拡散」、さらに「核軍縮」、「核廃絶」を国際社会に強く訴えかけています。カザフスタンのウラン鉱山事業には、2000 年代の半ば頃から住友商事、関西電力、丸紅、東京電力、中部電力、東北電力、九州電力、東芝等が積極的に参加しています。</p> <p>カザフスタンは、中国の新疆ウイグル自治区と長い国境を接する隣国で、中国政府が力を入れて推進する「一帯一路」構想の沿線国です。カザフスタンから中国への主要な石油パイプラインは「カザフスタン・中国石油パイプライン（KKT パイプライン）」で、カザフスタン中央部のアタスと中国の新疆ウイグル自治区アラシャンコウを結ぶ総延長約 3,000km の中国初の直接輸入石油パイプラインで、輸送能力は日量 40 万バレル（年間 2,000 万トン）ですが、接続パイプラインの容量不足が課題で、政府は拡張を検討中とのことです。</p> <p>カザフスタンはロシアと中国に隣接し両国との交流は不可欠ですが、同様のことが日本にも言えます。その強かな外交力を見習う点があるかもしれません。</p> <p>カザフスタンの首都は、以前、アルマティという所にありましたが、そこからは中国との国境に聳える天山山脈という雪を被った高い山があり、アルマティを訪れた日本人ユーチューバーの動画を見るとその風光は素晴らしく一度訪れたくなりました。山崎 博</p>
------------------	--

<p>会員からの コメント</p>	
-----------------------	--

幹事会 報告	<ul style="list-style-type: none"> ・学会運営費の増加をうけて91年会の参加費を一部値上げしたがシニア早割は 6,000 円と変わらず。補助は早割金額の半額。 ・月刊誌「化学装置」が廃刊となり、安全研究会が連載していた PSB 和訳は「配管技術」での掲載となった。
今後の 予定	2 月 山崎氏 リモート方式 3 月 猪股氏 リモート方式 4 月 見学会 5 月 西村氏 リモート方式 6 月 宮本氏 リアル方式 7 月 大谷氏 リモート方式 8 月 飯塚氏 リモート方式 9 月 神田氏 リモート方式 10 月 見学会 11 月 持田氏 リモート方式
次回日程	1. 日時 2026 年 2 月 10 日（火）15 時～17 時 2. 課題 山崎氏提供 3. 方式 リモート方式
次々回 日程	1. 日時 2026 年 3 月 10 日（火）15 時～17 時 2. 課題 猪股氏提供 3. 方式 リモート方式